

## 概要書

### はじめに 物語を生み出すもの 非古典的公共圏の海へ

仮名本『曾我物語』はどうして読みにくいのだろうか。本文を読んでいくと意味の通らない部分が続くこともある。登場人物についての情報が少なく、主人公との関係がよく分からないこともままある。引用された説話が長大すぎて、物語の流れを見失うこともしばしばだ。そのためか文学作品としての評価は低い。一部の出典研究や本文系統の研究はあるものの、ほぼ放擲されてきたに等しい。今では『曾我物語』と言えば真字本を読むのが一般的になってしまった感がある。

しかし、仮名本は『曾我物語』の中でも最も読まれたテキストであった。当時の読者達にとってもわかりにくいテキストであったなら、仮名本がなぜ広く読まれたのだろうか。

仮名本には、仮名本独自のエピソードというのはあまり多くない。物語の中心となる部分は、他の作品とも共通するエピソードで構成されている。現在残されている幸若や謡曲の曾我物を見ても、取り上げられるエピソードの内容は仮名本に取り上げられている場面とほぼ重なる。仮名本は物語内容に大きく偏りがあるのだ。曾我兄弟の伝承で、好んで享受される場面は決まっていたようなのである。それらは一編で完結した構造をもち、単独での鑑賞に堪えうる作りとなっている。断片的な物語の享受が成り立つ背景には、「曾我兄弟の物語」に対する理解を、享受者達が共有していたということが考えられる。曾我兄弟の伝承についてはみんな知っている、という状況だったのではないか。

曾我兄弟の話なら皆知っている。このような、当時の享受者達の記憶の中に存在した曾我兄弟伝承を広義の『曾我物語』と呼ぶ。皆が知っていれば、仮名本の語句が誤っていて意味不明であっても修正の必要を感じない。合理化して意味の通る本文に調べなくとも、それで物語を読み進めるのに不都合はなかったのである。

そうするともう一つ疑問が生じる。このような外在する共通理解に大きく依存した構成の仮名本と、それ自体で完結し一貫した構造をもつ真字本とは、果たして一直線上に並ぶテキストなのだろうか。『曾我物語』には大きく分けて真字本と仮名本があり、成立時期の古い真字本が「古態」で、それが増補加筆を繰り返しながら仮名本へと「成長」あるいは「変化」する、というのが従来の考え方である。『曾我物語』に限らず、軍記物の成立論は概ねこうした直線的な時間軸の上に展開されてきた。その理解は正しいのだろうか。

仮名本『曾我物語』は、和歌注釈、特に古今注の研究では、以前から注目されていた。片桐洋一以来、仮名本に古今注をはじめとする注釈言説が入り込んでいることは、断続的に指摘され続けてきた。注釈書と仮名本『曾我物語』の共通性は、様々な言説が入り込み、入り組んだ構造になっていることである。注釈書は多くの研究者によって分類整理が試みられているが、従来のような美しい系統樹を描くような思考法では整理できない。複数の説が入り乱れ、同じグループに分類されているテキスト同士でも、校合は不可能ということも珍しくないからである。そこで、ひとつのテキストが増補改訂されながら別のテキストへと発展していく、という考え方自体に限界があるのではないかと考えた。

曾我物語の世界は海のようなものである。そう考えると、断片的なエピソードの集積としてしか捉えられてこなかった演劇の中の曾我物の世界も含めて『曾我物語』の世界というものが何となく見えてはこないだろうか。演劇やその他語り物などのテキストを含

む、大きな曾我文化圏とでも呼ぶべき世界である。それは海のようなもので、現在「曾我物」として享受されているテクスト群は、海中に突きだした島のように、顕現の一つの形態に過ぎないのではないか。そしてこの海には注釈や巷間の説話やいろいろな雑多な要素が溶かし込まれている。それぞれのテクストは連想によって曾我の海から自らの語りた言説を引き出す。それはほぼ無限のバリエーションと広がりをもった行為である。

本論では、室町期の文化的背景を考えるため、「劔巻」を中心とした一章と、仮名本『曾我物語』を中心にした二章に分けて個々の問題を論じる。「劔巻」はその内容から源氏を賞賛する目的で作られたと言われ、揺るぎなき王権とそれを守護する源氏を寿ぐ内容になっているとされてきた。一種のプロパガンダとも読める内容と、その所属の不安定さに注目されることが多かった「劔巻」だが、後の世に与えた影響は大きく、その物語内容そのものももっと読み込まれてよい。仮名本『曾我物語』にも「劔巻」と類似した源氏の刀剣をめぐる説話が語られるなど、「劔巻」影響下に展開した物語もある。刀剣伝承というある程度の拡がりをもつ言説の出発点となっているのだ。この刀剣にまつわる物語は、刀剣伝書という一群の書物を通して、中世社会に広く行き渡っていた。和歌や連歌の知識と同様に、教養の一つとして刀剣の知識があったようなのである。

正統的な歌学の世界や、『伊勢物語』『源氏物語』といった「正典としての古典」には知の継承と伝達のシステムが整備され、古典を通じた知識人達のネットワークが形成されていた。そうした正統的古典とはまた違った、傍流歌学や軍記、刀剣伝書の知識などが混在する教養の世界にも、同様の、そうした教養を媒介としたネットワークが存在していたであろう。学問として顧みられることのなかったこれら非古典的教養は、しかし、中世人の中に深く浸透し、基礎教養的な役割を果たすことになったのではないか。『曾我物語』の流行などはその典型であろう。本論は、中世に確かに存在した非古典的文化圏、その海のような姿を僅かなりとも解き明かそうとする試みである。

## 第一章

### 「劔巻」の成立背景 熱田系神話の再検討と刀剣伝書の世界

『平家物語』屋代本などに付属する系統の「劔巻」は、古くは『平家物語』内部の「劔」の章段が増補改定を繰り返すなかで生じてきたとされていた。昭和五年に発表された伊藤正義氏の「熱田の深秘」で、劔巻と『あつたのしむひ』との類似が指摘されると、劔巻は「熱田系神話」との関わりが深いと言われるようになった。以来、劔巻は中世日本紀との関わりから論じられる傾向にある。

本論は、従来の中世日本紀からの論について、「熱田系神話」なるものの再検討の必要性を提起し、中世日本紀以外の、劔巻の成立に影響を与えた文化的背景について述べるものである。

熱田神宮の伝承と「劔巻」の間には隔たりがある。『尾張国熱田太神宮縁起』には縁起独自の記述とされる部分があるのだが、劔巻や『あつたのしむひ』にはそれが出てこない。独自の部分とされているのは尾張連の祖とされる稲種公についての記事である。東夷討伐のさい「天皇勅吉備武彦与建稲種公、服従倭武尊」とあるのに始まり、日本武尊が尾張国で稲種公の歓待を受けたこと、その妹宮酢姫を娶ったこと、遠征の帰りに再び尾張を訪れ

ると稲種公の死を告げられること、など、数箇所にわたりあらわれ、縁起の重要な部分を形作っている伝説であるにもかかわらず、その名は「剣巻」には現われない。「剣巻」が熱田神話の影響を受けて成り立っている、あるいは熱田系のテキストから本文を直接借用しているのだとすれば、自らのオリジナリティーが表れている稲種公の記事や宮酢姫による宝剣奉斎などを割愛するのは不自然であり、そうした点からも「熱田系」という言葉の定義や、熱田の神話と「剣巻」の関係は見直される必要があると思われる。

「剣巻」が成立してくる背景には、神祇説の影響以上に刀剣に対する興味関心の盛り上がりがあるのではないだろうか。刀剣についての伝承は鎌倉時代頃からみられるが、南北朝以降室町時代にかけて大流行する。刀剣伝書などの記述から、「剣巻」に名称があらわれる刀剣は、当時すでに名剣と呼ばれるような品々であったことがわかる。名剣、特に武家の刀剣にまつわる伝承はいつ頃から語られだすのだろうか。刀剣伝書の作られ始めた鎌倉期からあったとも考えられるが、軍記に取り入れられていくのは、もっと時代が下ったからのように思われる。名剣の物語は、古態本ではなく、後出の本文により詳細に記される。『太平記』になると古態本の段階からまとまった形で見られるようになる。となると「剣巻」の成立はやはり南北朝期を遡らないと言えるだろう。そしてその成立の下限は、屋代本の書写年代が応永頃とされていることや、長祿四年には単独で流布する『剣巻』（長祿本平家剣巻）がみられることから、室町初頭を下らないと言えそうである。

南北朝、室町という時代のなかで刀剣への興味関心が増大し、刀剣伝承が流行したという事実は「剣巻」の生成を考える際に看過してはならないと思われる。現在、刀剣伝書に対する文学側の調査・研究は始まったばかりであり、まだ不明なことが多いが、刀剣伝書が、「剣巻」とその他の軍記などの間で伝承が混乱しているといわれているものについて、考察の手がかりとなることは確かであろう。太刀伝承の生成と変容の過程を追うことは、それを通じて形成された軍記物における武将やその佩刀についての共通理解を知ることになる。それは小さいようであるが、軍記物というジャンルがいかに受容され物語が再生産されたかという大きな問題へとつながっている。

よって、今後「剣巻」を含め軍記物の研究には、諸本間の比較検討に加え、刀剣伝書などの資料も検討していくことが必要である。

### 「蜘蛛切」考 土蜘蛛説話の形成と漢籍

源頼光の土蜘蛛退治譚は中世に入ってからあらわれ、それ以降広く好まれた物語である。頼光の枕元に蜘蛛が現れて頼光を苦しめるといって「剣巻」にある挿話の系統と、頼光と綱が化け物屋敷に迷い込む形の東京博物館蔵本のものとの二系統があるが、広く能などに翻案されて親しまれたのは「剣巻」の系統である。土蜘蛛はその名が古代の異民族の土蜘蛛と同一であり、「朝家の御守り」を標榜する頼光に退治されることから、『日本書紀』などに見られる「王権にまつるわぬもの」である異民族土蜘蛛であると解釈されている。謡曲「土蜘蛛」では「葛城山に年を経し土蜘蛛の精魂なり」とあり、時代の下の「土蜘蛛草紙」ではまず間違いなく古代の異民族が蜘蛛の妖怪の姿で現れたものと解釈される土蜘蛛だが、不思議な点が二つある。まず一つは土蜘蛛の存在は『日本書紀』以降の文献には見られなくなり、中世、南北朝の時期になって始めて現れるということである。そしてもう一つは、頼光の土蜘蛛退治以前には日本に蜘蛛の妖怪譚が存在しない事である。また、

「劍卷」の蜘蛛退治も「土蜘蛛退治」であるともみなされているが、それは果たして適切な解釈なのだろうか。

土蜘蛛退治譚で最も古いものは、東京国立博物館蔵の『土蜘蛛草紙』（仮題）で、南北朝ごろの成立とされる絵巻であるが、その内容は「劍卷」とは相当に異なっている。時代が下ると頼光の土蜘蛛退治譚は単独で謡曲やお伽草子となって流布していくが、その内容は「劍卷」系統のものであった。

人気のおった土蜘蛛退治譚だが、蜘蛛の妖怪は中世になるまで確認できない。日本の国内で、蜘蛛に妖怪としてのイメージが希薄だったことは、中世の説話集にも蜘蛛の妖怪譚が一つも出てこないところからも伺える。「土蜘蛛」という名称そのものは『日本書紀』や『風土記』の時点で既に見られるが、そこでの描写は「身短くして手足長し。侏儒と相類たり。」（神武天皇即位前紀己未年二月）とはあるものの、それぞれが「新城戸畔」「居勢祝」「猪祝」という個人名を持つ存在として描かれている。ここだけでなく、その他の箇所にもあらわれる土蜘蛛もみな、それぞれ名をもつ「個人」として登場するのである。そこには妖怪に発展していく姿はみられない。

日本紀享受の影響も考えにくいとなると、妖怪としての土蜘蛛のイメージが作られる過程において、どうしても大陸からの文化の影響を考えずにはおけない。中国文学には古くから蜘蛛の妖怪が登場する。中国では早い時期に化け蜘蛛退治の物語が一定のパターン化した語りをもつところから、既に中国で確立していた化け蜘蛛退治譚を日本側が受容した可能性は高い。日本には古くから漢籍が輸入され、幼学の重要な知識として蒙求や和漢朗詠集などの注釈が作成されていた。また、平安の末期以降は宋代に編纂された類書も積極的に輸入され受容されていた。こうした類書のなかに蓄積された知が、蜘蛛の妖怪の造形に影響を与えたことは充分考えられる。

土蜘蛛という妖怪は中国風の趣向をもつ当時としては斬新な妖怪だったのではないだろうか。

### 「劍卷」の「創作」態度 宇治の橋姫をめぐる

劍卷」には「宇治の橋姫」と呼ばれる鬼の話がある。『古今和歌集』によまれた「さむしろに衣かたしき今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」という歌が、待つ女 嫉妬 鬼という連想をよび、変化してできあがっていった物語だとされている。物語中に貴船で呪詛する場面があるのも、橋姫が水辺の女神であることから、水神を祀る貴船との関わりや、そこにもつわる嫉妬による呪詛の物語を連想させたものらしい。柳田国男以来の解釈である。

しかし、「橋姫」のイメージは和歌の世界から「劍卷」へ、と緩やかに連続しているのだろうか。現存する橋姫に関連する説話にはいくつかのバリエーションがあるが、「劍卷」の系統の鬼の橋姫と、『奥義抄』などの橋姫とでは、その後世における影響の範囲も異なっている。これらの異なる物語はどこかでつながっているのか、それとも全く無関係に存在しているのだろうか。ここでは古今集注釈書に見られる橋姫説話の検討を入り口に、「劍卷」の橋姫説話の特殊性と、そこから見えてくる「劍卷」の性質について考察したい。

このように、「劍卷」の以前には類する話が見あたらず、「劍卷」以降では様々な作品に撰取され享受されているという話が多くある。こうしたことから、既存の素材を、その内容や伝来などを十分に踏まえた上で、あえて従来あるものとは異なる組み合わせ方をし、

新しい物語を作り出すという、「剣巻」の作者の性質が浮かび上がってくる。「剣巻」の作者はある意図を持った作者ではないか、と言ったが、その意図とは源氏礼賛という点だけに単純化できるものではないだろう。

「剣巻」に語られた橋姫の物語は二つの部分から成り立っている。前半はある公卿の娘が嫉妬のあまり貴船詣でをして鬼となる物語であり、後半は渡辺綱が一条戻り橋で鬼に遭遇し片腕を切り落として持ち帰ると、鬼が綱の叔母に化けて奪い返しに来るといふ話である。前半の鬼は場所を選ばず憎いと思う相手の親類縁者を狙って襲う鬼であり、後半の鬼は橋という決まった場所に現れ無差別に人を襲う鬼である。前半と後半では鬼の性質が異なっており、本来この二つの話は関係のない別々の話だったと思われる。

「剣巻」で綱を襲った鬼は一条戻り橋に現れるにも拘わらず宇治の橋姫と呼ばれている。宇治の橋姫にまつわる物語には二人妻と鬼橋姫の二系統があり、鬼橋姫の物語は「剣巻」以降広まったように思われる。和歌注釈の世界では宇治の橋姫は二人妻説話と理解されていたのが一般的だったようだ。しかし少数ながら鬼橋姫の説話を載せる注釈書もある。東大本『古今集注抄出』と京大本『古今集注（広貞注）』である。この本は古今集注釈の中では末流の注釈に属するようで、本説を多く含む。しかも独自の説が少なくない。東大本『古今集注抄出』は書写年代が室町初期とされており、京大本『広貞注』も成立年は永仁五年より下りそうであって、「剣巻」との先後関係ははっきりしないが、「剣巻」がこれらの古今集注釈書から説話を摂取している可能性も捨てられない。

「剣巻」では、既存の物語をそのまま語りに利用する、ということがほとんどない。たいていの場合、いくつかの既存の話を、従来には見られない取り合わせ方をして新しい話を作っている。そうでなければある物や出来事について、同時代に存在していた話とは別の話を語っている。しかも他に同じ系統の話は見あたらぬ。物語の進行とは深く関わらないところに知識を盛り込むところは、大変に饒舌で、知識欲の強さを表しているようにもみえる。源氏の太刀の話もそうだが、大きな一つの流れの中に多くの物語をはめ込もうとする傾向があるようだ。それは異なる歴史を語る姿勢にも通じている。刀剣の由緒を書き換えること、それは即ち刀剣にまつわる歴史を書き換え、新たな歴史を語ることである。持てる知識を残るところなく披露しようとする姿勢が、源氏の太刀の話を作り、草薙の剣についての膨大な蘊蓄を語り、従来の歴史とは異なる歴史をもった新たな世界を創造している。

しかし「剣巻」は、源氏の礼讃自体を目的として、意識的に物語を構成したテクストなのだろうか。「剣巻」が成立したと考えられる南北朝から室町初期にかけての時期は、足利氏の覇権が確立していく時代であるが、そのためのプロパガンダとして「剣巻」が作成されたと考えるのはあまりに短絡的ではないか。「剣巻」の源氏礼讃は、主に頼朝を礼讃するものであった。刀剣伝書の世界でも、頼朝の手元を経由した経歴が太刀に付加されたりしていたことを考えると、源氏というより頼朝の神格化が行われていたのであり、それは時代的な傾向であったと言える。「剣巻」が、一部でそうした時代の空気を反映していたとしても不思議ではない。そう考えると源氏の礼賛は目的ではなくむしろ結果であるう。

知識 それは記憶の中に蓄えられた様々な物語である を拠り所として物語を語ることへのこだわり、それが事典などをして「剣巻」を「中世的な小説」と言わしめる原因では

なかったかと思われる。

この物語が後世に与えた影響が意外に大きい事を思うと、今後、「王権とのかかわり」や「源氏礼賛」以外の「剣巻」の性質といったものに言及することも重要なのではないかと思う。また、今回十分に触れることができなかったが、古今集注釈書との関係についても今後検討してゆきたい。

## 第二章

### 仮名本『曾我物語』をとりまくもの 連歌・注釈・お伽草子

仮名本『曾我物語』に大量の説話がとりこまれていたことを指摘し、出典について述べたのは、昭和八年、御橋惠言の「流布本曾我物語に原拠あることを論じて物語の典拠ある詩句を挙ぐ」（『国語と国文学』昭和八年四月）であった。これを皮切りに様々な論が展開されたがその検証も甘く、初期の論は、いわば「言った者勝ち」の状態であった。こうした仮名本の研究状況は岩波の日本古典文学大系の編集まで続き、大系本の上梓を以て、仮名本の出典研究はひとまずの達成をみたことになる。しかし、この時点ではまだ注釈書や類書などが学術的な研究対象とはみなされておらず、民俗学的手法に重きを置いた大系本の注釈姿勢には言及の不十分な部分も多かった。そのためか、『曾我物語』の研究は真字本を中心とした研究が主流となつてゆく。真字本研究においては早くから唱導や『神道集』との関わりが指摘され、そこから導き出される真字本の「東国性」に注目した研究が展開されてきた。ここでも仮名本は真字本の世界観を理解できておらず、東国性を喪失した、文学性の低いテクストと見なされてきた歴史がある。

その後片桐洋一が『中世古今集注釈書解題 一』の序文で古今注に仮名本の出典未詳説話の類話があることを示すと、仮名本を構成する要素を注釈や類書、唱導などに求める研究が相次いだ。しかし、多種多様な「典拠」が挙げられるにしたがつて、仮名本『曾我物語』の属する世界を単純に唱導や注釈などに還元できなくなつてきている。近年、このような多様な知識が交差する場として談義や連歌が注目されている。

そこで、こうした状況を踏まえ、仮名本『曾我物語』を生み出した文化圏について、その一端なりとも論じてみたいと思う。仮名本本文の性格がどのような文化的背景に由来するのか、同時代の文学との関わりなどを考えることは、中世の一時期、特に室町という時代を考えることにもなるだろう。

仮名本『曾我物語』の様々な説話や故事成語・ことわざなどについてはこれまでの研究によつて、傍系の説話群や大量の成句は唱導や幼学、注釈などに関連が深いということが指摘されてきている。『曾我物語』に収録された説話に和歌注釈の影響がかなりあることが、片桐洋一によつて指摘されてから久しいが、その成果を引き継ぐように黒田彰によつてさらにいくつかの共通話が指摘され、仮名本『曾我物語』における和歌注釈の影響は無視できない状態にある。

古今集注釈と並んで仮名本『曾我物語』に影響を与えたものに和漢朗詠集注釈がある。典拠不明とされてきたいくつかの中国を舞台とする説話については、朗詠注の影響が認められることを指摘し、新たな資料を提示した。

注釈のような広汎な知識の交差する場として談義や説法の場合が注目されているが、連歌

もそうした場合の一つであったろう。古今集注釈の影響が少なからずみられるところから、歌学の知識を基本として、歌学を継承する形で展開した連歌の世界に、『曾我物語』との接点をみたい。

連歌の場合は中世において社交の場であったと考えられ、一座の中で一つの句に対し付け句がなされ、前の句と関連を持ちつつも違う方向へ句が展開してゆく知的刺激を楽しんだものであったと思われる。この遊戯を楽しむためには、当然共通の理解の下で句を展開していかなばならなかったろうし、そのために、ある言葉に対しどのような言葉を付けるのが適切かということを解説した「寄合」を集めた資料などが作成された。こうした資料の中には本説を書き記しているものもあり、当時どのような物語が歌語の理解の背景にあつたかを知ることができる。連歌資料の中に記された物語には、仮名本『曾我物語』と共通するものがいくつもある。また、仮名本は物語を連想で展開させていくことも多く、知識面でも発想面でも連歌的世界となんらかの関わりがあるのではないかと思われる。

仮名本『曾我物語』には大量の成句や説話が詰め込まれている。このことは何を意味しているのだろうか。仮名本における金言・佳句の引用は、類書からほぼそのまま引用しており、写本で間違つた語句や意味不明の箇所もそのまま板本に継承されている。これは真名本では本文で引用する成句にいったん解釈を加えてから引用するのは対照的で、仮名本には成句を正しく理解する力がない、もしくはその必要を感じていないのだと考えられる。そのためか、そのほか故事説話の引用についても物語本文との整合性を欠くものが多い。これはまさに、「知識を挿入すること」に重点が置かれた結果であり、仮名本『曾我物語』にとつて傍系説話や大量の金言・佳句はそれ自体が重要な構成要素なのである。

さらにこれまで検証してきた膨大な説話や挿入句が示しているのは、仮名本『曾我物語』にちりばめられた知識が決して特殊なものではなく、どちらかと言えば基礎教養に属するものであったことである。和歌や連歌の「秘伝」とされる知識が本文の中にみられると言つても、本説を多用する末流の伝書にみられる知識であり、それは歌学の秘伝にあこがれ、それを楽しむ人々のためのものであつて、本格的に歌学を修める人のためのものではない。仮名本の本文中に類書由来の故事成句説話の引用が多いのはそうした初歩的な知識が喜ばれたからであろう。そしてやはりその知識は専門的に漢学を修めたものの知識ではないのである。

御伽草子にはこうした歌学を中心とした知識をちりばめたものが多い。「鉢かづき」で鉢かづきの姫が姫君としての威容をみせるのも嫁合わせでの和歌の素養であつたし、「小栗」や「しんとく丸」で恋文を読み解くのも古歌や仏教などの知識である。「物くさ太郎」が出世する契機となるのも即答妙意の歌（連歌）の才であつた。物くさ太郎は「連歌の上手」であることで帝に召され、その才をいかにたく発揮して自らが本来貴種であつたことを示すのである。これは歌学の知識や連歌の才が、一種の「あこがれ」をもって受け止められていたことを表す。上智大学蔵『曾我物語抄（仮題）』（慶長一三年写 野口元大翻刻『上智大学国文学科紀要』一〇号・一一号 平成五年三月・平成六年三月）は、まさに知識に対する欲求を満たすために編纂されたような本であり、その内容は金言・佳句を抜き書きしたものと仮名本『曾我物語』の傍系説話の抜き書きが大部分を占めており、その他は『平家物語』などの軍記からの抜き書きとなつている。『曾我物語』から抜き書きさ

れた部分は、仇討ちとは関係の無い箇所ばかりで、『曾我物語』の享受の在り方の一片を示す貴重な資料である。仮名本『曾我物語』を読むことには、仇討ちの物語を楽しむ以上に、教養に対するあこがれや、知的欲求を満たすという楽しみがあったのかもしれない。

しかし、それ以上に、仮名本『曾我物語』を形作っているのは「連想力」とでも呼ぶべき知的傾向である。仮名本はある言葉やシチュエーションに対して何かを連想する。それは金言であったり、あるいは説話であったりするが、近代人である我々からしてみると、必ずしも適切な記憶の想起となつてはいない。連想が連想を呼び、時として物語としての構成を破綻させることすらある破壊的なまでの連想力なのである。読者は語り手の無尽蔵な連想力に擲め捕られながらそこから立ち上がってくる世界を感じ、その破壊的とも言える連想力そのものを楽しんで受け止めていたのではないかと思われるのだ。「トアラバ」と、言葉から言葉へ、イメージを頼りに限りなく飛躍し連続してゆくという連歌の発想を支えていたものも、多かれ少なかれこのような連想の力である。これはおそらく時代的傾向だったのではないだろうか。仮名本『曾我物語』はその具現化された一つの姿なのである。

### 熱田の楊貴妃伝説 仮名本『曾我物語』巻二「玄宗皇帝の事」を端緒として

楊貴妃に関する伝説は日本各地にあるが、中でも最も有名なものは熱田神宮の楊貴妃伝説であろう。話の主軸は、唐の玄宗皇帝が日本征服を企んだので、熱田明神が楊貴妃となつて玄宗の心を惑わせ、国を乱して計画を阻止させた、というものである。この熱田明神は楊貴妃であるという説は、近世においてはほぼ常識となつていたと思われる。現代においても「長恨歌」研究や、比較文化研究の方では早くから紹介されており、よく知られた伝説であるといえよう。

ここでは『曾我物語』に収められた話を手がかりに、中世における楊貴妃伝説の広がりや周囲への影響、文化的な位置などを考察していきたい。

熱田明神が楊貴妃となつたという説は、熱田の蓬萊伝説と密接な関係がある。熱田を蓬萊と見る説は『海道記』にすでに見られ、熱田明神が楊貴妃であるという説は『溪嵐拾葉集』に見られる。大体一四世紀頃から言われ出したことらしい。熱田明神の楊貴妃伝説は、二度にわたる蒙古襲来で、日本人の外国の侵略に対する危機意識が高まり成立した、という説があるが、蒙古襲来から伝説の成立まで、時間が空きすぎているように思われる。文永・弘安の役の直後から、熱田神宮は護国の神としての性格を明確に意識されるようになるが、それは楊貴妃伝説の成立に直接つながっていないのではなからうか。伝説が文献の上で確認できるのは、正安の蒙古襲来から約二十年後の近い時代ではあるが、その時点では伝奇的恋愛譚の世界を濃厚に反映した伝説にすぎない。それが「熱田明神が玄宗の日本侵略計画を阻止した」という話になるのが確認できるのは、それから更に二百年近く後なのである。この時期、日本国内では蒙古襲来への危機意識と共に神国思想が高揚し、伊勢神宮を中心に神国としての自国の独自性を強く認識し、外部へ打ち出す運動が起こってくる。こうした思想は「日本は粟散辺土の小国である」という劣等感の裏返しで、「我が国は他に並びなき神国である」という自尊心を植え付けた。それはやがて伊勢神道の域を超え、後には神道・仏教といった区別なく、日本人の自尊心を満たす物語となり、広く浸透していった。室町期になると、謡曲「白楽天」や、幸若などの作品にみられるように、文学のなか

にも日本人の優越感をくすぐる文言が目立つようになる。熱田の楊貴妃伝説は、危機意識をやわらげるためというより、こうした神国思想とともに高揚した自負心の反映として形成されたのではなからうか。つまり、この物語は「唐の侵略計画を未然に防いでくれたように、蒙古襲来の危機も熱田明神が回避してくれるだろう」というふうな恐怖に萎縮した立場から読むのではなくて、「あの大唐の玄宗皇帝でさえも熱田明神は籠絡したのだ」という、より積極的な姿勢の表れとして読むべきだと思つのである。

この熱田の伝説は遠く中国にまで伝わっていたらしい。元末から明の初頭にかけて活躍した宋濂は、日本の楊貴妃伝説を詩に詠んでいる。宋濂の著作は、中世、特に室町期を通して、五山の僧侶たちの間でよく読まれた。日本の伝説が留学僧によって中国へ伝えられ、それをまた輸入して読む、という交流があつたのである。特に宋濂の作品の場合、作者と享受者が直に交流していた時期もあり、五山において日本の伝説を享受する上で、宋濂が何らかの影響を与えた可能性もある。

『文安田楽能記』に、「勢田のしゅんかうもんの能」と記された演目がある。この「勢田」は「熱田」の間違いだろうと思われ、『能・狂言必携』によると、「熱田の春敲門の能」散逸曲か、とされており、詳細はわかつていないようである。ところが近世では天保一二年の『尾張名所図絵』などで、この「しゅんかうもんの能」とは謡曲「楊貴妃」のことである、と解説されている。この説はどこから興つたのだろうか。熱田の春敲門はかつて熱田神宮に実在した門で、建物自体は先の戦災で焼失してしまつたが、今でも小野道風筆とされる扁額のみが残されている。『長恨歌』をはじめとする楊貴妃伝説を扱つた漢籍の中には「春敲門」という具体的な門の名称は出てこない。だが、熱田の春敲門には、玄宗の使者である方士が、蓬萊宮（熱田）を訪れた時にこの門を敲いたという伝説があつたようだ。この伝説は清原宣賢の「長恨歌琵琶行抄」に見られる。「しゅんかうもんの能」が楊貴妃伝説に基づいたものであつた可能性は高い。しかし問題は、春敲門の名が記録の上に現れるのは天文年間になってからであり、『文安田楽能記』の文安三年（一四四六年）から清原宣賢の「長恨歌琵琶行抄」まで九七年の開きがあることである。春敲門にいつから楊貴妃の伝説が付随したのか、その上限については今後の課題としたい。

熱田明神が楊貴妃となつて日本を守つたという話は、単なる在地の伝説というにとどまらず、早い段階から全国的に広まっていく様相をみせていた。その流行のピークは中世末から江戸にかけてであつたようだ。中世においては『長恨歌』の享受を基盤として、各地で楊貴妃の伝説が作られていたようであるが、一六世紀になると、これまで述べてきたように熱田神宮の楊貴妃伝説が圧倒的な規模の広がりを見せている。そうして近世に入る頃には、各地の楊貴妃にまつわる伝説や文物は、この例のように、ほぼ常識化していた熱田神宮の伝承の下に位置づけられていくようである。また、楊貴妃や蓬萊の伝説は日本の内部にとどまらず、留学僧たちを通じて中国へも伝えられていた。

『曾我物語』巻二の挿話は、こうした広範囲に広がる楊貴妃伝説の一端であり、仮名本に増補された時期も他の文献に熱田の楊貴妃伝説が頻出しだす一六世紀あたりと思われるのである。

### 仮名本『曾我物語』巻五「貞女が事」の典拠 敦煌変文「韓朋賦」をめくつて

仮名本『曾我物語』巻五「貞女が事」の典拠は不明とされている。仮名本の中でも大山

寺本になく、その後の仮名本諸本にあるという、後になって増補された説話である。以下、物語の梗概を記す。

ある国に「しそつ」という王があり、その王に「かんはく」という男が仕えていた。「かんはく」は妻「貞女」からの手紙を王の前に落とす。手紙を見た王は「貞女」に興味を持ち召し出す。召された「貞女」が夫を想い嘆き続けるので、関白「りやうはく」が「かんはく」を不具にして「貞女」の気持を冷まそうと進言する。不具にされた夫を見て「貞女」がますます嘆くので、王は「かんはく」を淵に沈めて殺す。「貞女」は夫の死地が見たいと宋王に申し出、淵に身を投げる。淵には赤い石が二つ出現し、鴛鴦が遊んでいた。王がこれを見てみると鴛鴦が飛び上がって羽で王の首を切った。

この物語は最近まで、他に類例もなく、仮名本『曾我物語』のみのものだと思われる。二〇〇五年に鈴木元「中世注釈史のために」(『日本文学』二〇〇五年七月号 日本文学協会)の中で、『匠材集』の中にこの説話を下敷きにした記述があると紹介し、連歌書の中には存在することがわかった。だがその他には、どのように流布しているのかを示す資料はまだ見つかっていない。

しかし、中国文学研究の方面からは、敦煌変文の「韓朋賦」に近いという報告が以前からなされている。最も早い指摘は昭和三五年の早川光三郎による「変文に繋がる日本所伝中国説話」(『東京支那学報』第六号)であろう。そこではこの韓朋故事には『搜神記』にあるものと敦煌変文にあるものの二つの系統があり、仮名本『曾我物語』所収の説話は敦煌変文の「韓朋賦」に近いという。『搜神記』の説話は権力者によって引き裂かれた夫婦の悲劇を語るのみであるが、「韓朋賦」では最後に鴛鴦の羽によって王の首が落ちる結末となっており、『曾我物語』と共通する。その他にも王が韓朋の妻に興味を持つきっかけが妻の手紙であること、臣の梁伯の進言によって韓朋が不具にされてしまうことなど両者の共通点が多い。第一に登場人物の名が「韓朋」「かんはく」、「貞夫」「貞女」、「宋王」「しそつ」、「梁伯」「りやうはく」となっており、『曾我物語』への影響が考えられる。

中国でも敦煌変文については様々に研究が進められている。だが、伝承の古態を探る方向が主流で、後世における伝承の変化や流布などの研究はまだ非常に少ない。韓朋の故事が漢代にまで遡りうることは分かっているが、敦煌変文「韓朋賦」が後代にどう受容されたか、それとも散佚して忘れ去られてしまったのか、わからないことは多い。

日本へ伝播した韓朋故事は搜神記系と敦煌変文系にの二つに分けられるように思う。文学作品に残された足跡をたどってみたい。『搜神記』自体は、書名が『日本国見在書目録』に「搜神記 三〇巻」とあり、現存の二〇巻本とは系統が異なるものの、輸入されていたことが確認できる。三〇巻本の内容が現在の本と異なっていた可能性は十分あるが、韓朋故事に関しては、その他の唐代の類書に引用された本文がほぼ同一であることから、三〇巻本もほぼ、現存書の内容と同じだろうと思われる。韓朋の妻が自殺する場面、あらかじめ衣服を酒に浸して腐らせておくという描写があるが、それとはほぼ同じ描写が『古事記』「垂仁天皇記」のサホヒメが自害する場面にもあることなどから、早い時期から受容されていたものと思われる。その後『搜神記』系の韓朋故事の享受は続き、『三國伝記』や『言泉集』にも引用が見られる。

室町期になると、一部で敦煌変文系の韓朋故事の影響が見られるようになる。それは仮

名本『曾我物語』の他、連歌資料の『匠材集』、それから一部の女訓書の中に見られるのである。「韓朋賦」の影響を受けた韓朋故事が、室町期に突然確認されるようになり、その後物語は変化しつつも、近世の初めまで継承されたことが確認できた。

この他では注釈や和製類書、室町物語の中にも王への復讐を伴う韓朋故事は確認できない。禅僧の交流などによって中国からもたらされたものだろうか、とも推測するのだが、確証はない。近世でも中国の奇談を翻訳・翻案する動きがみられるが、韓朋故事の紹介はあまり多くない。近世の韓朋故事の出典は『搜神記』が主であり、「韓朋賦」の影響がみられなくなってしまう。「韓朋賦」の影響が見られるのは中世の一時期、それも一部の作品に限ってだけなのである。

流入してきた経路も時期も全く不明のままの「韓朋賦」だが、中世の一時期にしかその流行が見られないことを考えると、室町期の禅僧の活躍によるものとみるのが妥当だろう。一方で平安期に他の唐代俗文学作品と一緒に日本へ渡ってきた可能性もある。例えば仮名本『曾我物語』巻七にも見られる李広射石説話は、蒙求古注（平安末期）にあり、それとほとんど同じ文章が敦煌本『瑠玉集』の「善射」の項にある。それが鎌倉以降、古今集注釈などに現れてくるのである。古い時代に取り入れられた知識が注釈として蓄積され、中世の一時期に説話の一つとして出てくる、ということもあり得るのである。

日中両国での研究の進展を待ちたい。

### 曾我五郎仇討の太刀

仮名本『曾我物語』巻八「太刀刀由来の事」には、箱根の別当が曾我兄弟に授けた刀剣の由来が語られている。別当は十郎には「木曾義仲の三代相伝」の三種の宝物の内の一つ「微塵」という短刀を、五郎には義経が平家追討のため西国へ向かう際に箱根に奉納したという太刀を授けたとある。なかでも仮名本に書かれた五郎の太刀についての話は、幸若「剣賛嘆」や平家物語「剣巻」との関係が指摘されているが、これらはそれぞれに全く異なる伝承を含んでおり、平家「剣巻」と仮名本『曾我物語』、幸若「剣賛嘆」の間には、どちらかがどちらかに基づいているといった、単純な影響関係では読み解けない錯綜した状況があるのである。今回はその状況の一端を明らかにし、仮名本『曾我物語』を取り巻く文化的な背景について言及したい。

仮名本『曾我物語』に書かれた物語は、太刀が名を変えながら相伝されるという点で剣巻を踏まえつつも、かなりの相違が認められる。「剣巻」が二振の太刀を相伝していく物語であるのに対し、仮名本『曾我物語』では一振のみであり、その太刀の改名譚の内容もかなり異なっている。仮名本の物語は、「剣巻」や、『源平盛衰記』などの刀剣説話を引用したり要約したりして作られた切り貼りの物語ではなく、「剣巻」やその他の物語などにある刀剣伝承を素材として拾い、それを元に再構成されたものである。そこで中世に流通していた太刀の伝承と比較して見てみたい。

曾我五郎の太刀については複数の説が確認できる。鍛冶別に大まかに分けると五郎の太刀の作者を「長円」とする説、「助平」とする説、その他の鍛冶とする説となる。これらの鍛冶ごとの伝承は少しずつ性格が異なる。長円を作者とする説は、おおむね、義経が箱根に太刀を奉納した理由を平家追討の為に西国へ派遣されたからとしている。これは奉納の理由を梶原の讒言によって隔てられた兄頼朝との仲直りのためとする剣巻や幸若とは異

なり、仮名本『曾我物語』に合致する。助平の太刀はこのような箱根権現にまつわる伝承をもつておらず、おおむね記述も簡略である。その他にも、様々な鍛冶が五郎の太刀の作者として挙げられている。これらの説の中には、箱根の別当から太刀をもらったということを書かないものが多いが、曾我五郎が仇討ちの前に箱根の別当から太刀を授かったことはよく知られていたであろうし、箱根に納められていた太刀が、奉納されるに至る経緯はどうあれ、義経の佩刀だったことも広く了解されていたのではないか。よって、五郎が親の敵を討った太刀であると言っ刀剣伝書の記述は『曾我物語』の享受の上に成り立っていると考えてよからう。このように、仮名本『曾我物語』の伝承と刀剣伝書の説は、完全に一致するものではないが、部分的に重なり合いながら展開しているものと思われる。

また、刀剣伝書には繰り返し同じようなモチーフがあらわれる。「剣巻」なども共通して見られる太刀同士が勝手に切り合いをする話もその一つであろう。仮名本『曾我物語』で曾我五郎に与えられた太刀についても切り合いの話がみられるが、それは刀剣伝書にもみられる。手元にある太刀同士が切り合うという物語は、一族同士で争った源氏の歴史を象徴するかのようであり、やはり同じ一族同士の争いに端を発する曾我兄弟の仇討ちに、象徴的に重ね合わされているのである。さらに鍛冶名字考ではこの太刀が五郎の仇討ちの後頼朝の手に渡り、公暁が実朝を殺害するのに用いたとなっており、仇討ちにまつわる太刀として別伝が展開されている。ここでは父（頼家）を叔父（実朝）に殺された子（公暁）が父の敵を討つという物語になっており、公暁による実朝暗殺事件を曾我兄弟の仇討ちになぞらえてとらえるという歴史認識が伺える。ここでも、伝書類と『曾我物語』の関係は双方向的で、「剣巻」などの伝承を下敷きとする共通の文化的基盤があったのではないかと思われる。さらに、仮名本で箱根権現の別当が箱根には木曾義仲相伝の太刀があることなどを説明しているが、刀剣伝書の中にも木曾義仲の太刀の伝承が見られる。その他にも、十郎の太刀についても伝承があり、刀剣伝承はひとつの説話のカテゴリを形成していたものと考えられる。

中世後期写の『天地三国之鍛冶之惣系図曆然帳』という、お伽草子とも刀剣伝書ともつかぬ作品があるが、こうした作品の存在は、中世において刀剣の説が、刀剣鑑定のための専門知識の枠に収まっていなかったことを示唆する。巷間に溢れる物語は鍛冶の伝説として再生され、鍛冶の伝説は物語を増補・変容させるという双方向的な影響関係があり、その状況のなかで生み出されてきたものである。『平家物語』「剣巻」、仮名本『曾我物語』巻八「太刀刀由来の事」、幸若「剣讚歎」という太刀の伝承をめぐる物語も、こうした文化圏の一端に属するものだったのであろう。

仮名本『曾我物語』はその内容が饒舌で荒唐無稽であるといわれ、巻八の「太刀刀由来の事」も、「剣巻」の亜流の物語であるというような理解であったが、その内容を詳細に検討すると、「剣巻」や幸若よりもむしろ刀剣伝書などに近い文化圏で成立したのではないかと考えるようになった。しかし、刀剣伝書と『曾我物語』は直接的な影響関係にあるとは言い難く、その間にはやはり物語類の享受があったとするのが自然であろう。思うに刀剣伝書にある様々な説と「剣巻」などの文学作品は、その享受を通して相互に影響しあう関係だったのではないか。「剣巻」の周辺やそれ以降の文学作品において、刀剣伝承があまりにも多様化し、混乱を極めていく状況は、背後に膨大な異説を生み出す文化の存在なくしては考えられないからである。

刀剣に関する説の流布も、埋只本能阿弥銘尽の奥書に「右此銘尽天下連歌ノ宗匠能阿弥太方」とあるように、連歌師などの人々が関与していた可能性があり、刀剣の知識が広い範囲にわたって必要とされていた背景が考えられる。仮名本『曾我物語』の物語はこうした時代背景の中での、「剣巻」の享受と変容の一齣なのである。

#### 物語を動かす類型 観音生譚の二形態と仮名本『曾我物語』巻三をめぐって

仮名本『曾我物語』巻三の大半は幼い曾我兄弟の処刑をめぐる物語である。この物語は『平家物語』巻十一「六代」の影響を受けている。六代の物語は戦争で負けた者の子供達の運命を語る代表的な物語として機能していたものと考えられる。

曾我兄弟の処刑をめぐる物語にはいくつかの問題点が含まれている。類似した物語が多数存在することから、これが類型を利用した語りであると考えられることや、この物語内で兄弟を慈しみ可愛がる父として描かれる曾我祐信が、巻四では一転して冷淡な父となるという人物造形の矛盾があることなどである。こうした問題を、物語が持つ類型をもとに考えていきたい。それにより物語を形作り動かす類型の働きが見えてくるだろう。

「六代」と仮名本巻三、二つの物語は共通の類似した構造を持つというのみならず、主人公の助命がなくなったことについて「観音の利益」が言われている点も同じである。覚一本『平家物語』の「六代」では随所に観音信仰との関わりがちりばめられている。仮名本『曾我物語』では曾我兄弟の母親が日頃から普門品を誦読していたことが書かれており、同じ題材を元にした「切兼曾我」でも兄弟の命が助かったのは観音の利益であると言われている。仮名本の物語も元々観音生譚としての性格を持っていたものと考えられる。

これらの物語の基底に法華経、特に観世音菩薩普門品（観音経）の影響があることは間違いない。周知のとおり、観音経は観世音菩薩の多種多様な利益について説かれており、有名な「或遭王難苦、臨刑欲寿終、念彼観音力、刀尋段段壞」等の偈によつて知られているように、観音を信仰すれば、危うい局面に至つても命が助かると信じられていた。「六代」の末尾が「罪ある人も罪なき人も」と結ばれているのも、処刑の直前で切り手が太刀を投げ出してしまつたのも、典拠に基づくものなのである。

従来、六代の物語は長谷の観音信仰に基づいたものであり、長谷寺周辺で作成され流布していたものと言われてきた。特定の寺院で説話の管理が行われていたかどうかはともかくとして、観音経に基づく物語が一つのパターンを形成していたことは確かであろう。それは概ね「権力者による主人公の受難」「権力者への助命嘆願」「危うい所での救済」という流れになつており、様々なバリエーションをもって展開していた。

この類型は、処刑直前で助かるという基本の構造に、様々な要素を組み込みながら展開していた。観音経の偈を踏まえながらも「刀尋段段壞」をそのまま物語化したという簡単な構造の話は少なく、最も特徴的な「刀尋段段壞」についても、必ずしも太刀が折れるという奇瑞を必要としない物語が複数存在する。

軍記物の中にこの類型が多く見られる理由の一つに、戦乱の時代になつて、死刑、特に刃物による斬首刑が現実味のある災難として意識されだしたことが考えられよう。信西が保元の乱で死刑を復活させるまでの平安時代と呼ばれる三〇〇年ほどの間、死刑が皆無であったことは言うまでもない。最も重い刑罰が流刑であり、王権が死刑を執行することはなかった時代に、「王難」による刑死には現実感が伴っていなかったのではないか。そのた

め、福徳授与や病氣平癒といった、もつと身近で現実的な利益の方が大きく喧伝されてきたと考えられるのである。

もう一つには、この類型の持つ緊迫した物語構成があるだろう。処刑の直前で助かるという筋立ては必然的に場面に緊迫感を与え、物語を盛り上げる。そしてこの類型は助命嘆願の要素を入れることによつて質的な変化を遂げている。六代でもそうであつたように、仮名本でも助命に奔走するのは頼朝の御家人達であつた。神仏の影響よりも現実世界に生きる人間の行動が運命を動かすという意味において、「刀尋段段壊」の類型は大きく変質しているのだ。しかし、これほどの変化をしてもなお、処刑の直前で命が助かるという話を観音利生譚の枠組みで語らねばならないのは、処刑を免れるという物語展開が「刀尋段段壊」の偈と分かちがたく結びついて理解されていたからに他ならない。

類型にはこのような物語の大枠を規定する働きのもと、細かい場面ごとの具体的描写として物語の一部を構成するものがある。仮名本『曾我物語』でいうならば、「刀尋段段壊」の類型が物語の大枠を規定し、その中の場面毎の描写には先行する軍記物などに見られる類型が用いられている。仮名本『曾我物語』は物語の大枠においても、場面ごとの描写においても、先行する物語の描写を利用して組み立てられていることが多い。巻三では、物語の大枠を形作っているのは「刀尋段々壊」に基づく観音利生譚の類型であつた。そして、細かい場面毎の描写には先行する『平家物語』などの軍記物に現れる類型を利用してゐるのである。曾我兄弟を取り巻く登場人物、特に継父である曾我太郎の造形も、この場面毎の類型に大きく影響されている。曾我太郎の描かれ方は、『平家物語』の瀬尾太郎や熊谷直実の心情とも共通しており、この点から巻三の場面において彼は「慈父」としての役割を担っているものと考えられる。それが巻四になつて一転して冷淡な父となるのは、物語の枠組みが変わつたからであり、祐信の二面性を表すものではない。そもそも『曾我物語』に長編小説として首尾一貫した構成のもとに人物造形を行うつもりなどなかつたはずである。『曾我物語』にとつて長編物語とは、あくまで個別具体的な断片的挿話の積み重なりで織り上げられてゆくものであつたと思ひしい。よつて、場面が変わり、物語を動かす枠組みが変われば、それに合わせて登場人物も役割を変えるのである。

こつした特徴は、『曾我物語』以外の古典テクストにも、程度の差こそあれ、まま見られるものである。この現象は物語作者の力量や教養レベルの優劣によるものと考ええるより、古典的世界の物語創作法に由来すると考えた方がよいであらう。今後の研究において、物語の展開や人物像に矛盾が生じる時、そこには物語を動かす枠組みの転換があると考え、その枠組みが何かを探つてゆく手続きが必要になつてくるものと思われる。

### 往還するイメージ 仮名本『曾我物語』の連想力

仮名本『曾我物語』はこれまで「衡学的」だと評されてきた。本文のいたるところに仏典・漢籍からの金言の引用や大量の説話の補入があり、しかも引用された金言・説話が、適切な意味で適切な文脈に用いられているとは言い難く、それが知識をひけらかさんかのための引用だと捉えられてきたからである。また、仮名本のみを読んでいても意味の取りづらいう言葉足らずな記述や、物語展開における人物造形の一貫性のなさもしばしばやり玉に挙げられ、全体的に見て、仮名本は長編小説としての一貫性を欠く支離滅裂なテクストという、低い評価に甘んじてきたのである。

しかし、この評価は極めて近代的な価値観に基づく、「今」の時点からの一方的な評価なのではないか。仮名本は中世・近世を通して最も読まれた『曾我物語』のテキストであった。当時の読者に広く受け容れられていた事実は、近代的価値観とはまた別の評価があったことを示している。現代の我々からしてみると読みづらく不親切な組み立てになっている仮名本の現象は何に由来するのか。それは、仮名本が基本的な人物設定や物語のあらすじなどを、既に自明のものとして物語を組み立てたところから起るのではないか。

仮名本は真字本に比べて構成が甘いと言われることも、仮名本の組み立てが、物語に外在する曾我兄弟の敵討ちをめぐる物語群を共通理解として成り立っていると考えれば、納得がいく。外在する共通理解の上に物語を組み立てる仮名本にとっては、真字本が有するような構造はさほど意味があるものとは思われない。つまり、仮名本と真字本は全く別の次元にあるテキストだということである。

仮名本『曾我物語』では、似たような設定の人物やパターンの物語がいくつも積み重なって物語が展開する。その動きは物語の中だけでなく物語に外在する「共通理解」といふべきものをも踏まえて展開してゆく。それは近代小説が捨て去った物語作法であり、前近代には広く行われていた創作法である。本稿は仮名本『曾我物語』の解説を通して、前近代の知のあり方の一面を見、仮名本を再評価しようとするものである。

仮名本は神話から語り起こされ、神々の系譜は天皇家に繋がり、そこから源氏の起源となる惟喬・惟仁の位争いへと展開する。兄弟である惟喬・惟仁両親王が皇位を争う際、それぞれに真済・恵亮という高僧を味方に付け調伏合戦を行った結果、競馬で惟仁方が勝ち清和天皇として即位するという物語のその後、曾我一族の因果の起こりを語る「伊東を調伏する事」が置かれている。これは曾我兄弟の祖父にあたる伊東祐親が、祐親の祖父である寂心から本領を譲られた兄の祐継を呪詛するという話である。兄弟間での後継者争いというモチーフの共通性以外にも、呪詛の行為に具体的な描写がある点などが類似している。惟喬・惟仁の位争いから伊東祐継と祐親の所領争い、それに端を発する工藤祐経と曾我兄弟の確執へと、因果と怨念の物語は繋がってゆく。それは仮名本『曾我物語』の内側でのみ生成されているわけではない。外の世界にも展開する物語群をも含めて、共通の物語イメージで連結されているのである。更にこの説話は、その後清和源氏嫡流がたどった一族間の争いの歴史を思い起こさせる。清和源氏の起源に兄弟同士の争いがあり、保元・平治の乱を経て頼朝の鎌倉政権確立への動き、そして清和源氏の直系であり頼朝の子である鎌倉将軍が三代で断絶してしまった歴史過程において、あらゆるターニングポイントで同士討ちが関わっていることは改めて強調されてよい。こうした説話に蓄積された歴史の記憶の中で、仮名本『曾我物語』は一族間の争いの悲劇を曾我兄弟の周辺にのみ置き、頼朝をそれから切り離し賢王としてその治世を寿ぐ。それはあたかも源氏の歴史から同士討ちの連鎖を切り離そうとするかのようである。

頼朝の治世を寿ぐ文言に、「民の竈は朝夕の煙ゆたかなり」という一文がある。本文には頼朝の具体的な統治ぶりが描かれておらず、この文言は唐突に差し挟まれた印象をうける。「民の竈」の文言にはそれが想起させるあるイメージがあったのではないか。「民の竈」の歌は仁徳天皇の御製とされ、歌字の世界では「難波津に」の歌と対のものとして理解されていたようだ。では、対となる難波津の歌が示すものは何か。それは仁徳天皇の即位をめぐる物語であった。仁徳天皇は弟と互いに位を譲り合った後に、弟の死を受けて「争

いなくして「即位したのであり、これに対し源氏の起源に置かれた惟喬・惟仁の位争いは、兄弟で帝位を争い呪詛の応酬を繰り返す物語であって、仁徳天皇の即位譚を反転した完全なネガとなっている。一族の起源に同土討ちをもつ頼朝の治世について「民の竈は朝夕の煙ゆたかなり」と仮名本『曾我物語』の語り手が高らかにうたいあげるとき、同土討ちで幕を開けた源氏の歴史は、争いなく即位し徳政を敷く理想的な君主のあり方に置き替えられた。その時、陰惨な同土討ちの連鎖は頼朝から切り離されている。同土討ちの歴史は呪詛のイメージによる物語の連結を通して曾我兄弟へと引き継がれていくのである。

なかでも同土討ちのイメージを象徴的に担っているのは、曾我兄弟が敵討ちに用いた太刀であろう。敵討ちの場面では、五郎がまだ幼少の頃に工藤祐経から与えられた短刀でとどめを刺すが、その他にも印象的に敵討ちをめぐって太刀の物語が展開する。同じ持ち主の手下にある太刀が切り合うという物語は、一族同士で争った源氏の歴史を象徴しており、やはり同じ一族同士の争いに端を発する曾我兄弟の仇討ちに象徴的に重ね合わされていると見てよいだろう。さらにこの太刀が五郎の敵討ちの後に頼朝の手に渡り、更にその後、公暁が実朝を殺害するのに用いたとする説もあり、敵討ちにまつわる太刀として新たな物語が展開されている。そこには父（頼家）を叔父（実朝）に殺された子（公暁）が父の敵を討つという物語があり、公暁による実朝暗殺事件を曾我兄弟の仇討ちになぞらえてとらえるという歴史認識が濃厚にある。これはやはり曾我兄弟の敵討ちと頼朝に連なる源氏の歴史を重ねて捉えるという享受のあり方が、仮名本の外にもあることを示しているものと言えよう。

とはいえ、こうした伝書類と仮名本『曾我物語』との関係はあくまで間接的なもので、直接一方が他方に影響を受けた・与えたというものではないだろう。曾我五郎の太刀をめぐっては、「剣巻」などの伝承を下敷きとする共通の文化的基盤を有する文化圏があり、そこではイメージは絶えず物語の内外を重層的に往還し、相互に影響を与え、共通概念というべきものを創り上げていったと思われる。かかる共通概念があったからこそ、五郎の太刀には、仮名本の外部で醸成された同土討ちの物語と非業の死を遂げた源義経のイメージが付帯し、このことにより仮名本『曾我物語』で源氏から切り離され曾我兄弟に受け渡された怨念の連鎖を、太刀という象徴物を通して物語の外で再び源氏に戻すという荒技まで行ってしまうのではなからうか。

以上、仮名本『曾我物語』とそれをとりまく言説を考察してきた。先行する物語や言説を踏まえての創作という行為は古典全般に言えることでもあるが、仮名本『曾我物語』はその傾向が顕著であり、曾我兄弟をめぐる共通理解に大きく依存する形で物語を展開させてきたと考えられる。近松門左衛門の曾我物は流布本の『曾我物語』に依拠しながら、そこに近松独自の解釈やアレンジを加えて劇化されているといわれているが、その傾向は近松以前、『曾我物語』を生んだ中世においても同様だったのではないか。

『曾我物語』、就中仮名本は、その装飾部分において、読者の物語への参入を許すことによつて多様な諸本を生み出してきたといわれる。その営みを支えたのは、諸注釈やその他膨大な言説の流れ込む巨大な知の海と、その上に張り巡らされた連想の網である。『曾我物語』は文学や演劇作品というテクストとして存在するもののみならず、書き残されなかつた伝承も含めて 曾我物語 という一つの大きな世界を形成していたと思われる。その中には様々な言説が混在していて、ある物語を語ろうとすると殆ど反射的に連想され引

き出されてくる。真字本・仮名本『曾我物語』の他にも多数存在する所謂「曾我物」のあり方を考えるとき、それらの多くが敵討ちの乱闘を中心に、あとは断片的なエピソードの寄せ集めであることから「曾我兄弟の敵討ち物語」の大筋は読者の共通理解の中にあつたと想定できる。この共通理解の及ぶ範囲はかなり広がつたと思われる。近世の歌舞伎における曾我物の大流行は、広義の曾我物語が国民文学というか、日本人の基礎教養ともいふべき拡がりを持つていたことから起こつた現象ではないだろうか。『曾我物語』を書く・読む、「曾我物」を創る・享受するという行為は、その共通理解を踏まえただで物語をいかに飾るかという魅力的な行為であり、時に物語の構造すら破綻させかねないほどの自由とエネルギーをもつた行為だつたのである。

#### おわりに 残された問題

仮名本『曾我物語』を中心にその特質や室町期の文化的特徴を見てきた。仮名本というテクストは文化的背景の異なる複数の物語の寄せ集めであるように考えられる。中世においては個々の物語の成立にまつわる文化的差異を飲み込んで共存させる広汎な世界があつたのではないかというのが今回の論文での大きな主張である。

中世における非古典的公共圏が、以降の民衆文化発展の素地となつたことも考えられ、正典化しなかつた文学がどのように作られ、読まれ、どのように広まつたかという問題はもっと考えらるべきだろう。

物語の形式、人物造形など、仮名本に残された問題もまだまだ多い。仮名本『曾我物語』の享受のあり方が近世に入ると変化してくる点も問題だろう。長期的な目で各時代における享受の変遷を考えることは、中世において軍記がどのように享受されていたのかという問題につながり、現在「軍記物語」として存在するジャンル分けの意味を問う行為になるはずである。